

寫すのは今かくと待構へて立つて居ると、誰だか、

「鼻を注意しろ。」と後から喚いた者がある。

併し振返つて誰の鼻が危いのか確める譯に行かなかつた。だから僕はそつとジョージの鼻を見た。ジョージの鼻は別條はなかつた。今度は自分の鼻を流し眼でそつと見た。此れだつて申分なし、鼻はちやんと顔の真中にくつ附いて居る。

「馬鹿野郎、鼻だと言つてるに。」と矢張り前と同じやうな聲が今度は一層高らかに怒鳴つた。

「鼻を押し出さんかい、これ、二人で犬を連れてる男つたら。」と又一つ違つた聲が叫んだ。

ジョージも僕もまだ振り返らなかつた。寫真師が今にも筒の蓋を抜き去つて、撮影しやうも知れぬ。奴等が怒鳴りつけて居るのは一體誰だらう、鼻も

妙ぢやないか。何故又鼻を押し出すんだらう。

すると水閘一杯總立になつてわい／＼言ひ出した。中に一つ甲高な聲で、「船を見ろ、船を、おい赤、黒、帽つたら。早くせんと死骸が寫るぞ。」と喚いた。

驚いて振向いた。するとボートの舳が水閘の横木に突き挿まつて、船の周圍には水閘へ流れ込む水が高く波打つて居る。船は今にも覆る所である。僕等は稻妻のやうに櫂を取り上げた、そして其端で一突き水閘に突ツ張つたところ、其拍子に逆様に船の中に引つくり返つた。

僕等は二人とも寫真には巧く撮らなかつた。僕等が仰向に引つくり返つて「おやく／＼何うした」と云ふ顔付をして、足を四本空中に振り廻はして居る時、寫真師の野郎破れ器械を廻して寫し居つた。此れも矢張り水閘がさせたんだ。

寫真中の大立物は言ふまでもなく四本の足で、其外の者は殆んど齒牙に掛くるに足らなかつた。前景は四本の足で埋めて居た。外の船や、其れを圍繞して居る断片的の光景は唯だ足の蔭に小さくなつて居た。だから水開内の景色も人物も四本の足に比較すると全く無意義で、其中に撮影された人物など、顔出しもならんと云つたやうな風に見えた。

或る河蒸汽の持主で初め六枚程寫真を註文した奴は、實物を見ると厭だと言つて頭を振つた。そして誰でもいゝから乃公の船を寫真に出してさへ呉れゝば貰つてもいゝと言つたさうだ。併し其れは出來ない相談だ。船はジョージの右足の蔭になつて居た。

後の談判が大分ごたつた。寫真屋は寫真の十分の九は僕等が占領して居るんだからつて、十二枚だけは僕等に引受けさせる積りらしかつたけれど僕等は無論承諾しなかつた。僕等は唯だ至紙大に撮影しても異議はないから、

出來るならもう少し恰好宜く寫して貰ひ度いと言つた。

スツリートレーの六哩許り上手に當るウフリングフロードは古い町で、英國の中心になつて居る場所である。羅馬の軍隊がブリトン人を追ひ拂つて粘土の壁を宏大な城壁に改造する迄は、此地に部落をなして居たブリトン人は粗末な粘土の壁で町の外堀を造つて居た。併しローマ人が築いた城壁はテムス河の水も洗ひ流すことは出來なかつた。此れで見ると昔の左官もなかなか侮り難い腕前を持つて居たものらしい。

ローマ人が造つた城壁には勝てなかつた時の流れも、ローマ人だけは滅ぼして土に變せしめた。其後此同じ處で蠻勇に富んだサクソン人は、北人入寇の時迄和蘭人と戦争を續けて居た。

此地は國會戦争の頃迄は矢張り城壁を繞らした立派な町だつたが、其後フエヤファクスの爲め長い間酷たらしく包圍されて遂に降伏した。其時城壁

は皆取壊されて仕舞つた。

ウヲリンググフロードからドウセスターに至る迄の間、河の附近は一帶に山勝ちであるが、變化に富んで居て繪のやうに美しい。ドウセスターは河から一哩許り離れた處に在る。小さいボートに乗ずればチームスから漕ぎ上ることも出来るが、併し最上策はデーの水閘で船を捨て、原野の中を徒歩するに限る。ドウセスターは静謐と、緘黙と、倦怠の中に眠つた、昔ながらの土地で、美しい平和が到る處に満ちて居る。

此地はウヲリンググフロードと同じく古代の一市邑で、其頃はケーヤード・ローレン即ち水上の町と呼ばれて居た。昔ローマ人が此地に陣營を敷いたことがあつたが、其城壁は今も猶ほ平坦なる丘の形をなして残つて居る。サクソン時代には此處はウエセックスの城下になつて居た。此處は古い歴史を持つて居る處で、昔は強大を誇つた處であつた。併し今日では騒がしい世の中を他

處にして、こくろく居眠りをして居る。

クリフトン・ハムブデンは、昔めいた、平和な、美しい村で、言はゞ花で覆はれたやうな處であるが、此邊一帶の河の景色は實に華やかである。クリフトンに上陸して其處に夜を明かすことがあつたら、パーレー・モーと云ふ宿屋に泊るが一番宜い。僕は保證するがチームスの上流では、先づ此宿屋位古風で面白い宿屋はない。此宿は村から離れて橋の際に建つて居る。その低い破風や、藁葺きの軒や、四つ目格子の窓など云ふものが宛然昔話にでもありさうで、家の内の造作などは又一層「むかし」化せられて居るから面白い。此家は此頃の小説に出て来る女主人公の宿屋には不適當だ。何故つて此頃の女主人公は皆身長が高い、其處へ持つて来て何時も反ツくり返つて歩いて居る。だから此家の造り具合だと先生達一步毎に天井に頭を叩き付けやうも知れぬ。

そしても一つ此宿は酔漢が泊るには都合が悪い。だつて室を出たり、入つたりする階段が餘り不規則で、一旦出た寢臺を探り當てたりするのが如何にも困難だからである。

其翌日は、午前中にオックスフロードに到着したい豫定だつたから早く床を出た。野營した時は誰も不思議な程早く床を出る。ボートの底にカバンを枕にして毛布にくるまつて居ると、常の臥床に目覺めた時と違つて、「ア、もう五分間」と云ふ氣が出ないから可笑しい。僕等は朝飯を濟まして八時半迄にクリフトンの水閘を漕ぎ抜けた。

クリフトンからクルム迄は兩岸の景が平板單調であるが、テームス河中で一番深いと言はれて居るクルムの水閘を出ると、河の景色が漸く目立つて来る。

アピングドンの處は河が町に接して居る。此處は小規模の代表的田舎町で、

静かではあるが奥深い、又清潔な割合に何處となく眠つたげな處である。此町は古いので有名であるが、併しドーセスターや、ウヲリングフロードと比較して古いと言へるかは疑問である。昔は此處に有名な寺院があつた、而も其遺跡と稱せられて居る處で、今日エール酒が醸造されて居る。

アピングドンのセント・ニコラスと云ふ寺院には、ジョン・ブラックウナル夫妻の爲めに建てられた記念碑がある。此夫妻は幸福な生涯を送つて、千六百廿五年八月廿一日に日と同じうして死んだ。それからセント・ヘレン寺院には千六百三十七年に死んだダブリュ・リーと云ふ人の石碑があつて、碑面には「生存中子を儲くること二百人に三名を缺きたるのみ」と記録されてある。

だからダブリュ・リー氏は百九十七名の家族を作つた譯になる。此人は五回アピングドンの市長に選ばれた人だと傳へられて居るが、氏の如きは後世子孫の一大恩人と言はねばならぬ。併し人が多過ぎて困る十九世紀には、此種類

の人が餘り澤山あるのも考へものである。

アピングドンからニューンハム・コートニーに到る一帶の地は、沿岸の景色が非凡だ。ニューンハム公園は行つて見る價値がある。火曜と木曜とが公開日になつて居るが、陳列館には立派な繪畫骨董類が集められてあつて、園内の布置も整つて居る。

サンドフアードの築の下に池があつて丁度水閘の下手に當つて居る。此池は溺死するに一等の處である。此處は瀬が早いから、一度底に潜つて瀬に巻かれると溺死は請合ひである。此處で泳いで居て溺死した二人の男の爲めに尖塔が一つ立て、あるが、塔の階段は水に飛込んで瀬踏みをして見やうと云ふ青年の足場になつて居る。

牛オックスフォード 津の一哩許り手前にイフリの水閘があるが、此處は河を愛する畫家が好んで畫題にする處である。併し畫にして見ると存外つまらない。此れは

僕の經驗であるが、何處でも畫にして見ると存外つまらないやうだ。

僕等は十二時半に此水閘を通過した。それから上陸するばかりに船を整頓して、愈々最後の半哩を漕ぎ抜く準備をした。

イフリーと牛オックスフォード 津の間はテムス河中の難所で、誰でも其れを實驗する爲め一度は乗つて見度がる處である。僕は現に何回もやつて見たが、一度も成功した事がない。牛オックスフォード 津からイフリー迄真直に漕げる男なら、姑と、姉と、赤ん坊時代から奉公して居る召使と、一棟の内に愉快に暮して行ける男である。先づ一の瀬が右の岸へ船を流しつけるかと思ふと、次の瀬は左の岸に船を流す、左に流れたかと思ふと何時かもう中流に押し流されて、其處で二三遍ぐるぐやつてる間に今度は上流の方へ逆に流される。そしてとゞの詰りは學校のレースボートへ流しかけられて、今にも打つかるか冷汗をかくやうな目に合はされる。

これだから僅か一哩か其處らの内に澤山のボートの邪魔をする、其れを此方から言へば澤山のボートに邪魔される事になる。だから其結果悪口のはざき合ひとなる。

河に行くに誰でも得て怒りッぽくなるやうだが、一體何う云ふ譯だらう。陸では殆んど氣附かずに濟まして居やうと云ふ事件が、河だと氣が狂れる程癢に障る。ハリスとジョーシが陸で馬鹿な真似をやると、僕は何時も笑つて見て居るが、河だと早速怒鳴り付ける。他の船が此方の邪魔をすると、僕は權を取り上げて、乗つてる奴を片ツ端から叩き殺してやり度くなる。

陸ではお人よしの男でも、一度船に乗ると殺伐な位氣が荒くなる。僕は一度若い美人と二人ボートに乗つたことがある。此女は性來こんな優しい性質の人間もあるものだらうかと驚かれる位溫和な方であつたが、河に来るとさあ大變、傍から聞いて居ても聞きづらい程亂暴な言葉遣ひをした。

他の船が行く先に塞がつて邪魔でもすると、

『何だね、圖々しい、何故もつと氣を付けてないんだ。』と喚きつける。それから思ふやうに帆が上らないと、

『ほんとにこんな厄介な奴つたらありやしない、二割者の癖に。』なんつて怒りつけて引つ摺り様厭と云ふ程振り廻したりした。

此れで居て陸だと、前にも言つた通り蚤さへ捻らないつてな性質なんだ。河の空氣は人の品性を下す効能を備へて居る。船頭共が時々亂暴な真似をしたり、静かな折に考へると言はずに置けばよかつたと思ふやうな暴い言葉を弄するのも、矢張り之が爲めであらうと思はれる。

十九

牛 津で僕等は二日間愉快に過した。此處には犬が澤山居る。モントモ

レンシーは初めの日に十一回、二日目に十四回喧嘩した。そして天にでも昇つたやうな考で居た。

虚弱だからとか、或は餘り仕事が面白くないからとか、其理由はまあ何方でもいゝが、其爲め遠漕でもやつて見やうと云ふ連中は、牛津にボートを廻して此處から漕ぎ下るのを例として居る。併し遠漕と云ふ奴は、何時も瀬について流されてばかり居ても餘り香ばしくないものだ。脊中を四角にして早瀬に逆つて、遮二無二漕ぎ上せる所に遠漕の面白味はある。僕は少なくとも、ジョージとハリバが櫂を擱んで、自分は舵を取つて居る時慥かにさう感じた。

僕は牛津を起點として漕程に上らうとする人には、人にボートを氣付かれないやうに狐鼠裡使用する手腕があらば兎に角、若しさうでない以上は自分のボートに乗つて出掛け給へとお勧めする。テームス河の貸ボートでもマ

ロー附近のなら一般に上等で、水にも堪へるし、又注意して取扱ひさへすれば壊れたり沈んだりする患はない。此處らのボートだと坐る場所もあれば、必需品だつて大概——否幾んど十分に——備付けてあつて、存分漕ぐことも出来れば舵を扱ふことも出来る。

併しこんなボートは見場が悪い。此マローから上流で貸すボートは、之に乗つて大きな顔をしやうと云ふ種類のボートぢやない。此邊の貸ボートは乗組人に此種類の虚榮心を満足させるやうな具合には出来て居ない。此れが其特徴、否唯一の長所であると、斯う言つても先づ差支はあるまい。

貸ボートに乗つて居る連中は何時も恥かしさうに逃げ尻を構へて居る。だから成る可く樹蔭に身を隠したり、人に逢はないやうに、夜明け前か日没後に狐鼠裡乗り廻つたりする。

誰か知つた奴の顔を見付けると、此連中は早速岸に這ひ上つて樹蔭に隠れ

たがる。

僕は或る夏四五日間遠漕をやつて見る積りで、五六人組んで貸ボートを借りたことがある。併しまだ誰も貸ボートを見たことが無かつたものだから、實際其れを見せられてもボートだか何だか能く解らなかつた。

僕等は四丁櫓のボートを貸して呉れと前以て手紙を出して置いた。そして鞆を提げて船場へ着くと、手紙を出して置いたのは僕等なんだと言つて名乗りを上げた。すると艇庫の老爺が、

『はい、四丁櫓の方を貸せと云つてよこしなすつたのはお前様方でしたか、ようがす。』と答へて小僧を振り返り、

『おいぢム坊、あのな「テームスの花」を出してあげなさい。』と吩咐けた。

小僧は出て行くと約五分間も経つてから、近頃何處からか發掘されて、而も發掘中不注意の爲め傷だらけにされました、前世紀の遺物で御座いとでも

口上を言ひさうな代物を引きすり出して来た。

僕は其奴を一目見ると、あはあローマ時代の遺物——左様遺物と言つても何の遺物だか解らないが、先づ差當り寢棺の遺物かなあと斯う思つた。

テームスの上流にはローマ時代の遺物が多い。だから僕が斯う考へたのも必ずしも無理な想像ではなかつたと思ふ。ところが其時一行中少し地理學を嚙つた青年が居て、野郎僕の「ローマ」説を否定して、此れは前世紀の鯨の化石だとは馬鹿が見ても解るぢやないかと言つた。そして僕が馬鹿にも如かぬと云ふのを野郎少なからず氣の毒がつて居るらしかつた。そして結氷期以前の物であると云ふ考證を幾つも／＼並べ立てた。

僕等はお互の説に就いて小僧に其判断を仰いだ。そして何も心配するには及ばんから、其れが果して前世紀の鯨であるか、或は「ローマ」の遺物であるか、遠慮なく打明けて呉れと言つた。

そしたら小僧は「チームスの花」ですと答へた。

最初僕等は此返答を小僧には寧ろ上出来の返答だと思つた。だから一行中の一人は其褒美として奴に四錢だけ握らせた。すると野郎圖に乗つて今度は何時迄も下らんことを言つて巫山戯るから、僕等は仕舞に怒り出した。そして頭株の奴が、

『おい、貴様そんなに馬鹿ばかり言つてないで、お母さんに其の手桶を提げて行つてやれ、そしてボートを早く出して呉れんと困るぢやないか。』と言つた。

すると今度は船大工が自身其場に出張して、俺は職掌柄嘘は言はぬが、此れはボートに間違ひない、——而も態々僕等の遠漕用に供へる爲め特に選び出した四丁櫓のボートだと斷言した。

僕等は暫時愚圖／＼言つて、兎に角前以て言つて寄越して置いたんだから、

綺麗に洗ひ上げて置くとか、それともペンキでも塗つて發掘物と間違へぬ位には手を加へて置いてても宜からうと言つた。併し奴は其儘で立派なものだと心得て居つた。

だから奴の方では僕等の苦情を却つて不當だ位に考へて、自分の方でも有りたけのボートの中で一番立派なのを選んだから、僕等は正に大に感謝す可きだと言つたやうな口吻だつた。

彼は「チームスの花」は過去四十年の間今の通り(否、今整つて居る通り)見事使用に堪へて来たもので、未だ誰一人其れに故障を申立てた者はなかつた。だから僕等が率先して此奴に就いて故障を申出する理由はあるまいと言つた。

僕等はもう議論は止めた。

僕等は此曰く附きのボートを紐で縛つて、破損した處に紙を貼つて、神様に願を掛けて乗込んだ。

僕等は此破れボートの六日間の借り賃として十七圓と五十錢だけせしめられた。馬鹿な事をしたもので、之れだけの材木なら一圓五十錢から二圓四十錢も出せば、何處の海岸でも流れ寄つた材木を賣つてゐる處へ行けば大威張りで買へたんだ。

三日目から天氣が變つた。——さうだ、僕は今迄遠漕記を書いて居たんだ。

——僕等は練雨の最中を牛津から歸程に就いた。

河は——日光が其躍れる流に閃めく時、闇緑色の兩岸の樹々を黄金色に彩る時、暗く冷かな森の小逕に閃く時、追ふ影と亡ぐる影と相亂るゝ時、水車の輪に金剛石の雫を滴らす時、岸に咲く百合に接吻する時、水開の白泡に戯るゝ時、苔蒸せる壁や橋に白銀を伸べる時、巷々に隈なく光被する時、小逕と牧場に美しく輝く時、蘆の中に靜かに覗き込む時、小島の蔭を笑ひながら覗き廻る時、眩しげに沖の白帆に輝く時、美しく柔かに空氣に溶け入る時

——河は黄金の如く美しき流である。

併し河の水が冷たく物憂げに、例へば薄暗き室で飲泣く女のやうな、しめやかな雨を、絶えず其灰色の鈍い水面に降らせて、其傍には禍を司どる悪魔か、或は捨てし友の怨靈かとも見える、悪魔の如き森が霧の被衣を着て、淵に立つ幽霊の如く暗くじめくゝと烟つて居る時、——河は歸らぬ悔の叫を聞く、恐ろしき彼の世への渡し場かとも思はれる。

日光は天地の生氣の源泉である。日光が天を去る時、大地は生命なき眼尻を我等に投ぐる。日光を見ぬ世界は人の悲哀を思はせる、人は其時世界は我を去り、我を捨てたかと思ふ。日光を失へる世界は夫を失へる寡婦の如く、其手を取り其額を仰いで懷づき寄る我々は、其微笑をだも得ることを許されぬ。

其日は終日雨の中を漕いだが實に陰氣だつた。初めの間は其れでも強ひて

愉快だと云ふやうな顔をした。そして此れも變化があつて面白い、河の様子だつて時には違つて居るのも面白いからなど言つた。そして何時も快晴な事ばかりあるものではない、又そんな事を希望するの間違つて居る、天地が涙ぐんで居るのも又一興ぢやないかと話し合つた。

初め五六時間の間僕とハリスは全く漕ぐ事に夢中になつて居た。僕等は巡禮の生活を歌つた歌を聲高く唱つて、家にすつ込んで風雨を厭ふ者を嘲りながら、日に焼かれ嵐に吹かれ雨に曝されて、然も之を友とする巡禮等の自由な生涯を讚美した。

ジョージは獨り濼い顔をして傘の下に潜り込んだ。

行厨を開く前にテントを張つて、午後も張り詰めて居た。そして舳の方に少し明きを取つて其處から權も操れば、見張りもすることにした。斯んな鹽梅で九哩だけ漕ぎ下ると、デーの水閘の少し下手に漕ぎ入れて野營した。

僕は其晚愉快だつたと白状する譯に行かぬ。雨は小歇みなく降りしきつた。

ボートの中は濕つぼくつて何も彼もへたくたへばり附いた。晩飯だつて甘くは食へなかつた。冷たい肉饅頭なんか、腹が減つて居ない時は胸にもたれるばかりだ。僕は道明寺とカツレツが欲しかつたし、ハリスは舌比目魚と和物が欲しいと言つて、肉饅頭の食ひ掛けはモントモレンシーに譲つた。そして野郎何だか斯う氣まづさうな顔付をして居たが、狐鼠々々ボートの片側へ行つて、けろりかんとして其處に坐つた。

ジョージは兎に角自分が芥子も掛けずに食つて居る養冷ましの肉を平らげて仕舞ふ迄、そんな話は止して呉れろと言つた。

食後は賭け事をして遊んだ。一時半許りやつて居る内ジョージが十六錢ばかり勝つた。(ジョージは花歌留多には何時も運が宜い)僕とハリスは一人で八錢宛負けた。

ハリスはもう賭け事は止めやう、勝負事に凝ると病的な刺戟が充ぶるからと言つた。ジョージは少し續けて一つ復讐して見ては何うだかと言つた。併しハリスと僕は運勢を弄ぶのは面白くないからと言つて見合はせた。

それからアルコールを調合して、其れを取圍みながら四方山の話をした。ジョージは二年前遠漕に出掛けて、丁度今夜見たやうな晩に河で野營したばかりに僕麻質斯になつて薬石効なく、十日の後非常に苦んで往生した或る男の話をした。死んだ時はまだ若くつて許嫁の女があつたが、僕はまだ斯んな氣の毒な話を聞いた事はないとジョージは附け加へた。

此話でハリスは偶然、義勇兵に投じた彼の友達が矢張り今夜見たやうな晩にオールドーショットに二晩濡れて野營した爲め、翌朝起きて見たら跛者になつて居たと云ふ話を思ひ出した。ハリスは歸つたら君達に此男を引合はしても宜いが、見たばかりでも慄毛が立つやうな爲體だと附け足した。

斯んな話が端なく腎骨痛、熱病、感冒、肺病、氣管支炎等の話になつて仕舞つた。そして今醫者も居ない處へ持つて來て、僕等の内誰か一人急病になつたら何うだらうつてな事を話した。

斯んな話の後何か氣を浮き立てるやうなものがあつて欲しかつた。だから僕は少し陰氣臭くなつたからバンジョーでも取り出して、道化歌でもやつて見ては何うだいとジョージに言つた。

僕はジョージの爲めに辯護して置くが、彼が宅に樂器を忘れて出たのは何も外に理由があつた譯ではなかつた。だから奴は大に喜んで僕の言を容れた。そして早速バンジョーを取り出して、

「可愛い、可愛い、あの眼の縁の……」と云ふ一曲を始めた。

僕は平生此曲を平凡な曲だとばかり思つて居た。だからジョージが其際此曲から溢るゝ如き悲哀を弾じ出した時は全く驚いて仕舞つた。

悲しげな曲が進行するにつれて、僕はハリスと相抱擁して泣き交はさうかとまで思つたが、併し互に努力して涙を押へ、僕は黙つたまゝ悲しげな音曲に聞き入つた。

合唱の箇所になると僕は強ひて愉快にならうと思つて、渾身の勇を絞り出した。僕等は更に杯を満たして合唱に入つた。ハリスは感に打たれて聲を顫はして先を取り、僕とジョージは一二行後れて後から合唱した。

「可愛い／＼あの眼の縁の

拳固の跡は、驚いた、

お前ア不實だと恨んだ罰に……

可愛い／＼あの眼の縁の」

此の先はもう遣れなかつた。今にも泣き出し度くなつて居た僕等は、「可愛い、／＼、あの眼の縁の」と云ふジョージの感に堪へぬと云つたやうな聲を

聞くと、迎ももう堪へられなくなつた。ハリスは小兒のやうに泣き出すし、モントモンシは心臓が破裂するか、顎が飛び出すかと氣遣はれる程吼え立てた。

ジョージはも一つ何か他の曲をやつて見たいと言つた。奴の意見ではもう少し調が整つて来て、此方でも又幾分曲に力を入れて、存分打ち込んでやりさへしたら、斯んなにまで悲しくはあるまいからと云ふんだつた。併し僕等は反對にもう此處らで切り上げて置かうと言つた。

其れから何も爲る事がなかつたから床に就いた。——と言つても、着物を脱いで、船の底に三四時間轉がり廻つたと云ふに過ぎぬ。そして五時迄うとくして、五時には皆跳ね起きて朝飯を食つた。

二日目も全く初めの日と變らなかつた。雨は注ぐやうに降り續けた。そして僕等は雨合羽にくるまつたまゝ天幕の下に坐つて徐ろに流された。

僕等の内誰か——果して誰だつたか今は忘れて仕舞つたが、何だか僕自身だつたやうにも思はれる。——朝の間一寸、自然に弄ばれて而も其れを樂しむ雲水行者のやうな氣持を存分挑發して見やうと思つて、一寸下らぬ事をやつて見たけれども駄目だつた。併し

「雨が降らうと、矢が降ると……」

と云ふ一節を、其時の僕等の心情を説明した歌として其時歌つて見る必要はなかつた。

僕等は兎に角一つの點に於て一致して居た。其れは假令何んな事があつても、僕等は最後迄遠漕をやらうと云ふのだつた。

僕等は十四日間は河で暮らす積りで出て來た、だから十四日間の苦樂は是非河で經驗して行くと云ふ覺悟だつた。河で死んだら何うしやう、死んだら友人や親戚は迷惑だろ、併し迷惑したからつて仕方がない。僕等は此れ位の

氣候に身を置いて、尙も天氣に屈服したなど云ふことは、今後下らぬ先例を作ると云ふ點から見ても由々しき一大事だからと考へた。

ハリスは又、

『もう後二日のことぢやないか。而も僕等は血氣盛んな青年だ。これがやり切れずに何うする。』と豪語した。

四時頃になつて僕等は晩の事を相談した。其時僕等はゴーリングの少し下迄來て居たから、バングポーン迄行つて其處で泊ることにしやうと決心した。『又一騒ぎするか。』とジョージが言つた。

僕は端坐して四邊の光景を眺めた。五時にはバングポーンに着ける筈である。すると晚餐は左様六時半頃になるだらう。食事が濟んだら雨に叩かれて寝る迄は村を歩き廻つて、宿に歸ると帳場に坐つて闇いランプの明りで柱曆が讀める。

ハリスは其時一寸頭を天幕の外に出して、空模様を眺めながら、

『これでアルバムブラはもう少しや陽氣だらうね。』と言つた。

『それから例の處へ行つて晚餐か。』と僕が思はず口走ると、

『だから何うあつてもポートを出さないなんつてなことを言ふのが間違つて
るよ。』とハリスが附け加へた。そして暫時皆黙つて居た。

稍やあつてジョージは六ヶ敷い顔付をして、

『さうだ、此棺桶見たいなポードと討死してもいゝなんてなことさへ口外し
て居なけりや、五時何分かに幸ひバングポーン發の汽車があるんだから、其
れにさへ乗りや丁度いゝ頃に町に着いて一寸した物もやれるし、其後で君が
今言つたやうな處へも行けるんだけども、斯んな事を提議するのも全く無意
義には終らないんだがなあ。』と意味有りげなことを言つた。

誰も皆黙つて居た。そして三人顔を見合せた。すると相互に、自己のさも

しい考が他人の顔付にも歴々と反射して居るやうに思はれた。黙つたまゝ靴
を取り出して中を検めた。河上にも河下にも人影一つ見えなかつた。

廿分の後見すばらしい犬を一匹連れて、垢脱けもせず、美も盡さる大凡
左の如き服装をした三人の人影が、狐鼠裡スランの艇庫を脱け出して停車場
の方へ行くのが見えた。

土だらけの靴、黒皮。運動衣、甚だ垢じみたり。鳶色の帽、竹の皮の如き、
雨合羽、漬る程濡れたり。蝙蝠傘各々一本宛。

僕等はバングポーンで舸子を誑して來た。何だか面目なくつて雨が降るか
ら逃げるんだとは能う言はなかつた。僕等は明朝九時に歸るから其用意をし
て居れと吩咐けて、ポードと、其れに積載してある物を一切彼に任せて船を
出た。それでも船を出る時は、若し、(若し……だから可笑しくなつて仕
舞ふ。)何事か出來して其爲め船に歸られんやうな事になつたら手紙を出すか

らと言ひ残して出た。

七時にバディングトンに着いて、前に言つた料理屋に行つて一寸した物で腹を拵へて、モントモンシーと、十時に歸るから其れ迄に御馳走を作へて置けと云ふ命令を残して、再びライセスターの方へ出掛けた。

アルハムブラでは衆人の眼を惹いた。入場料を拂ふ場所へ顔を出すと、キヤッスル・スツリートの方へ廻れ、もう一時間半許り時間が遅れてるからと断られた。

だから金を受取る奴に、「僕等はヒマラヤ山の追劔」ぢやないから安心しろと懇々説諭して、漸く入場料を握らせて札を受取つた。

場内では更に成功した。僕等の日に焼けた面と、繪に見るやうな服装とは場内の總ての視線を聳動した。僕等は視線の的になつた。

僕等は其時程得意になつた覺えは滅多にない。

狂言見物は初めの一幕だけで止めて、先の料理屋に戻つて見たら晚餐が出来上つて居た。

其味は格別だつた。僕等は十日間許りの間、殆んど冷肉と、菓子と、麵包とジャミで命を繋いで居た。此等の物は、粗末ではあるが滋養には富んで居る。併し斯んな物には此れぞと云つて心を喜ばせる美味さは一つもない。ところが此處ではパーガンデイ酒の香が先づぶんと鼻へ來る、佛蘭西製のソースが香る、ナフキンが眞白で、長手に切つたバンも有る。此等の物が相寄つて精神の内容に擦つたい程充實せる満足を與へた。

初めの間は物も言はずに取込んだ。が暫時経つと眞直に腰掛けて、ナイフと肉叉を確乎と持つてるのも厭になつた。僕等は椅子に凭れたまゝなぶり食ひを始めた。——そして食卓の下に兩足を踏み揃へて、茫然ナフキンを床に落したり、煙が渦巻いて居る天井を仰いで初めは眼にも着かなかつた模様ま

で仔細に検査したりする餘裕を生じた。——それから届く處まで腕を延ばしてコップを食卓に置きながら、考へ込んだやうな、娑娑ッ氣を離れたやうな、何とも言へぬ好い氣持になつた。

其時窓の近くに座を占めて居たハリスは、幕をはね退けて街道を見下した。街は浸つたやうになつて闇く光つて居た。薄暗いラムプは風に瞬いて、水溜に重吹く雨は屋根を傳つては溝に落ち込んで居た。すぶ濡れになつた通行人は傘を滴らす傘の下に小さくなつて、婦人は裾を繋げて走つて居た。

ハリスは此時手を伸べてコップを取り上げながら、
『今度の遠漕は確かに愉快だつた。テームス河は有り難いや。——だけど出た處で船は捨てることにしやうぢやないか、三人共現在ボートを出てるんだからね。』と言つた。

後足で窓の際に立つて夜の町を覗き出して居たモントモレンシーは、一寸

一つ吼えてハリスの翹音に賛成の意を表した。

のらくら三人男 終

明治四十四年五月十六日印刷
明治四十四年五月二十日發行

のらくら三人男

定價金八拾錢

著作者 浦瀨七太郎

發行者 山縣文夫

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

印刷者 荻原勝次郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地



不許複製

發行所

東京北豐島郡巢鴨町上駒込二十番地
電話(長距離加入)下谷四百三十八番

内外出版協會

(振替貯金口座東京三百五十五番)

佐々木邦譯

いたづら小僧日記
續いたづら小僧日記
おてんば娘日記

(第二十一版) 定價金四拾錢 郵税四錢
(第十版) 定價金參拾錢 郵税四錢
(第十二版) 定價金參拾錢 郵税四錢

▲「東京朝日新聞」曰く

夏目漱石氏の「我輩ハ猫デアル」と同工にして異曲其かしむる所は此れ却て彼に優る所の天

▲「東京日々」亦曰く

奇想天外より落ち来る所漱石の「我輩ハ猫」以上なり、凡て創作の風致

▲「文藝俱樂部」曰く、いよいよ出て、奇抜なるいたづら、讀みて頭を解かざる者なげむ、夏目漱石氏の「猫」に隨喜せし人々は必ずや此書を讀みて多大の興味を感受すべく、實に近來稀に見る珍書と
▲「新佛敎」曰く、實に面白い、讀んで吹き出し、又讀んで吹き出す、實に奇想天外より来る底のものを、讀んで居る。今日の日本の文壇で、この位のものを書き得る者は、まづ漱石か楚人冠位だ
▲「笑」曰く、事端の繁きだけいたづらは愈々奇抜になり、面白きこと限りなし。記者も之を讀み行なる書と云ふべし。

佐々木邦著

當世良人氣質
當世細君氣質

(第五版) 定價金四拾錢 郵税四錢
(第四版) 定價金四拾錢 郵税四錢

新佛敎の評

内外出版協會が「いたづら小僧日記」「おてんば娘日記」を出して、洛陽の紙價を高からしめてからといふものは、模倣性に富んだ他の出版業者は、われもくんと類書を發行して、今や其の「本家は本家」だけのこと。數十幾種にも及んで居る。併し矢張り「程面白いものはないやうだ。今この『當世良人氣質』は、その『いたづら小僧日記』と原著者を同じうし、譯者を同じうし、發行者を同じうして居る。そして此の主人公たる「良人」は、彼の「いたづら小僧」の兄さんとも云ふべき資性から、寢臺の上で踊つて、寢臺を踏潰す位の事件を、虫歯で苦しんで居る底の飄輕者、妻の妹と、自分の「讀んで頗る面白」は、世間の本屋親友と結婚させるまでの道筋、讀んで「面白」は、世間の本屋倣性を發揮することだらう。

博士マンテガツア原著
佐々木邦譯

良人の選定

(全二冊) 定價金參拾錢 郵税四錢

東京東區鴨町上野三丁目五番地 内外出版協會 元版

東京東區鴨町上野三丁目五番地 内外出版協會 元版

The Three Homes

庭家三小説

本美綴スロク * 版再評好
錢貳拾稅郵 * 圓壹金價定

純良なる品性を養成し高潔なる情操を鼓吹する本
書の如きは誠にか家庭小説の上乗なるものと謂ふ
可し。予は原書が英米の多くの家庭に珍重せられ
るが如く、此譯書が我多数の家庭に歓迎せられん
ことを切望して已まざる者なり。

▲原田同志社長序文の一節

同志海老澤氏、有名なる英書『三家庭』の翻譯を公
にせらる、行文流暢にして章句簡淨、よく原文の
妙趣を傳へて、而も邦人の理解に易からしめたる叙
述の巧なる、真に一讀卷を捨つるに忍びざらしむ
實に是れ我國現時の家庭に推奨する能はざる好
文なり。余は日本教育の爲に此書の廣く日本家
庭の間に行はれんことを切に祈る。

▲新渡戸博士序文の一節

博士 フアラ 原 著
海老澤 亮 譯
新渡戸 稻造 序文
同志社長 原 田 助 序文
法學博士 農學博士 神學博士
同志社々長 原 田 ユリツキ 序文

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 元版
番五十五百三京東金貯替振

庫文俗通

編譯泉冷島百

(編十第)

子公小

上中流社會の家庭に廣く讀まれ、少年少女諸子の世界に善
良なる感化を與へつゝある本叢書に、此の『小公子』でいよく
第十編に達しました。これは彼の有名なる良小説『リットル
ロード、フォントルロイ』の縮譯であります。故若松女史の
『小公子』は、いかにも名譯でありますが、家庭の讀み物、少
年少女諸子の讀み物としては、長い原作を巧みに縮めて、而
かも極めて面白く解り易く出來て居る本書の方が適當であら
うと信じます。
(定價金貳拾錢 郵稅四錢)

- (第一編) バンヤ天路歷程
BUNYAN'S PILGRIM'S PROGRESS
- (第二編) ストウの奴隸
STOWE'S UNCLE TOM'S CABIN
- (第三編) 聖書物語
THE BIBLE STORIES
- (第四編) 赤靴物語
ANDERSEN'S FAIRY TALES
- (第五編) トルストイの二人巡禮
TOLSTOY'S TWO PILGRIMS
- (第六編) ロビンソン
ROBINSON CRUSOE
- (第七編) イソップ物語
AESOP'S FABLES
- (第八編) シェークスピア物語
TALES FROM SHAKESPEARE
- (第九編) グリムお伽噺
GRIMM'S FAIRY TALES

各卷繪入 總フリガナつき
各册定價金貳拾錢 郵稅四錢宛

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 元版出
番五十五百三京東金貯替振

文學士 皆川正禧譯述

ワグネル物語

定價金六拾錢 郵稅六錢

時事新報文藝週報批評

此書はラムの「セクスピア」の如く、ワグネルの歌劇の梗概を物語風にのりたるもの、讀者はこれに依りて、略は原作構想の妙致を窺ふを得べく、未だ獨英の文に通せずしてこれ等世界の大作の内容を知るには最も便利なり。本書所載總べて七篇、外に「ワグネルと其著作」と題せる一文を添ふ。「リエンジ」は羅馬に於ける最終の保民官リエンジを主人公とせる悲劇にして、流音に迷はされ易く、恒信の依る所なき多数民衆の爲めに諷かれて、一團の猛火に包まれたる政劇の露臺の上に、毅然として最後の息まで、國の爲めに盡せる勇士の面目を見るべく、「幽霊船」は魔神の呪詛を受けたる、所謂幽霊船に關する、頗るミスチックなる物語、「歌客タシホイゼル」と歌曲の長とは、歌曲に巧なる天才を主人公とし、麗麗類なき佳人を女主人公とし、一は悲劇的に、一は光明的に結べるもの、「鴉の武士」は聖山サルツアントの聖杯寺守護の任に當れるローヘングリンが、鴉の翼に乗りて王女の急を救ふといふ物語、「王妃の嘆き」は一篇の悲劇、「呪詛の指環」は九篇中の最良長篇にして「ライラの黄金」「戦姫」恐れぬ勇士「神族の破滅」の四小篇に分れ、ニヘルンゲンの古語に想を構へたるもの、神秘多趣、讀む者を驚かすに在るに古語裡の人たらしむ。譯者の文章は華麗にして聊かの滯滞を見ず、此種の翻譯には、持つてこいの才筆なり。装釘の贅を除き、量に比して價の頗る廉なる、最も記者の心を得たり、近來稀に見る好翻譯といふべし。

東京 芝罘 鴨居 上野 駒込 二丁目 十二番 地番五十五 内 外 出版協會 元版

ドン・キホーテ物語

(再版) 定價金四拾錢 郵稅四錢

譯邦木々佐

中外英新字評語

西班牙の沙翁と稱はる、セルヴァンテスのドン・キホーテは、世界文學の一として何人も一讀せざるべからざる小説なり。本書は即ち同書の縮譯本を和譯したるものにして、口語體の譯文は全く創作のものに見え、此種の翻譯としては上乗のものとしげなる大陸小説の翻譯より、本書の怪譚奇子の見逃がしてはならぬ新刊なり。

愛國婦人の評語

今からザット二百五十年前から二十世紀の今日まで、絶えず歐羅巴の家庭に愛讀される、西班牙の國民小説セルヴァンテスの傑作ドン・キホーテの、英文縮譯本を譯したものであります。罪がなくて讀みながあつて、教訓になると共に用ひ張らない本であります。巻中に原本通りの挿畫が處々に入つて居るのには尙更嬉しいことと思ひます。

法螺男爵旅土産

(再版) 定價金貳拾錢 郵稅四錢

譯邦木々佐

少年諸君、及び少年諸君の父兄諸君！ 諸君はまだ「法螺男爵旅土産」と云ふ途方もない話のタネ本を御存じあるまい。遠い國へ長い旅をして戻つた人は、歸來其の見聞談をばなすに、往々事實を勝手氣儘に取り扱つて針小棒大の談を眞面目でやる。けれども若し途方もない云ふことが話を面白くする所以であるならば、彼等の話し様は、まだ大に途方も無さが足りないといつてはならぬ。「法螺男爵旅土産」の著者は斯う考へて、其の途方もない想像を驅つて多くの途方もない旅行見聞談を作つた。途方もない古今無類である。面白いことも古今無類であるかどうだかは、諸君一讀してのち判斷して呉れ給へ。

東京 芝罘 鴨居 上野 駒込 二丁目 十二番 地番五十五 内 外 出版協會 元版

貝塚

澁六譯

ノンキ者のノンキ話

忽ち三版

定價四金拾錢 郵稅四錢

版元

▲東京朝日新聞曰く——英國文士ジロームの名著「アイドル、ソーツ、オプ、アン、アアイドル、フェロー」を日本人に面白く譯したものは、皮肉で無邪氣で、滑稽で、其の輕妙滑脱なる筆致、文に熱せざる人の爲し得る所にあらず。

▲國民新聞曰く——其の日本化の面白味無類と稱すべく、且つ其の滑稽に皮肉にも『いたづら小僧』以上の趣味あり、誰が讀んでも面白き珍書也。

▲萬朝報曰く——譯者貝塚澁六は假の名にて、本統は堺枯川千なり。ジロームの文七分に澁六の文三分の譯文輕妙。

▲中央新聞曰く——極めて無邪氣な皮肉な而かも趣味あるもの、なか／＼面白し。

▲都新聞曰く——譯文輕妙自在にして、毫も疏譯臭くなし。其のノンキさ、諷刺、皮肉、趣味津津々たる觀察、實に面白き讀み物なり。

▲藝備日々新聞曰く——輕妙自在の好文、願を解き臍を捻らしむ。面白きこと此上なきものなり。

▲下野新聞曰く——無邪氣極まる、皮肉千萬なる、而して趣味津津々たる輕妙の文字、譯者が英文に精通せるだけありて、頗る巧妙に譯出されたり。

▲河北新聞曰く——讀み去り讀み來りてナール程ノンキ者の思想は異つたものだと、腹を抱へて笑ひつゝ倒れざる者はあらざるべし。

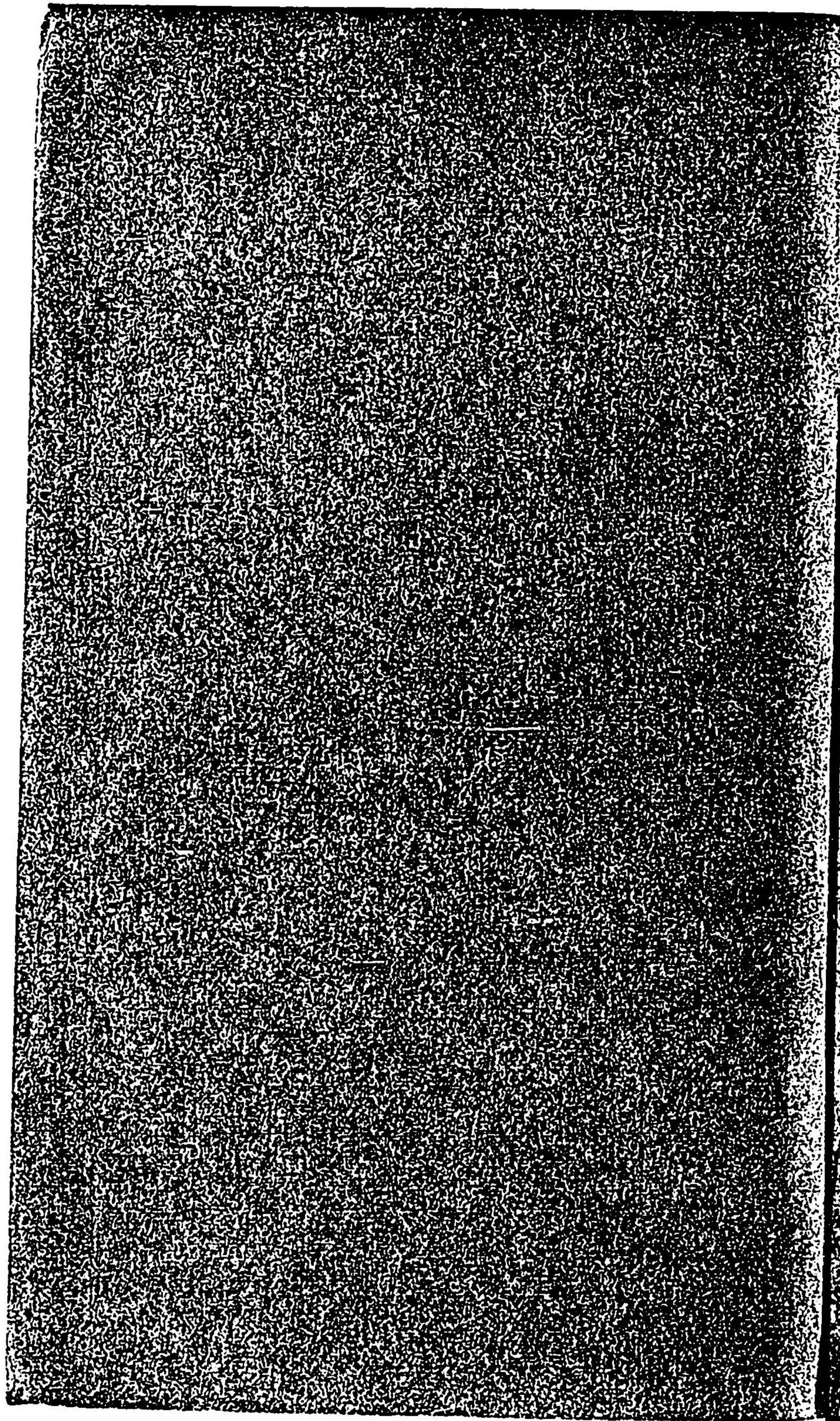
内外出版協會

東京 芝罘 青島 濟南 濰縣 煙台 龍口 威海衛 營口 奉天 遼陽 錦州 承德 張家口 歸綏 包頭 西安 蘭州 西寧 銀川 迪化 哈密 喀什 和田 吐魯番 哈密 鄯善 庫車 焉耆 阿克蘇 庫車 焉耆 阿克蘇 庫車 焉耆 阿克蘇

元版

388

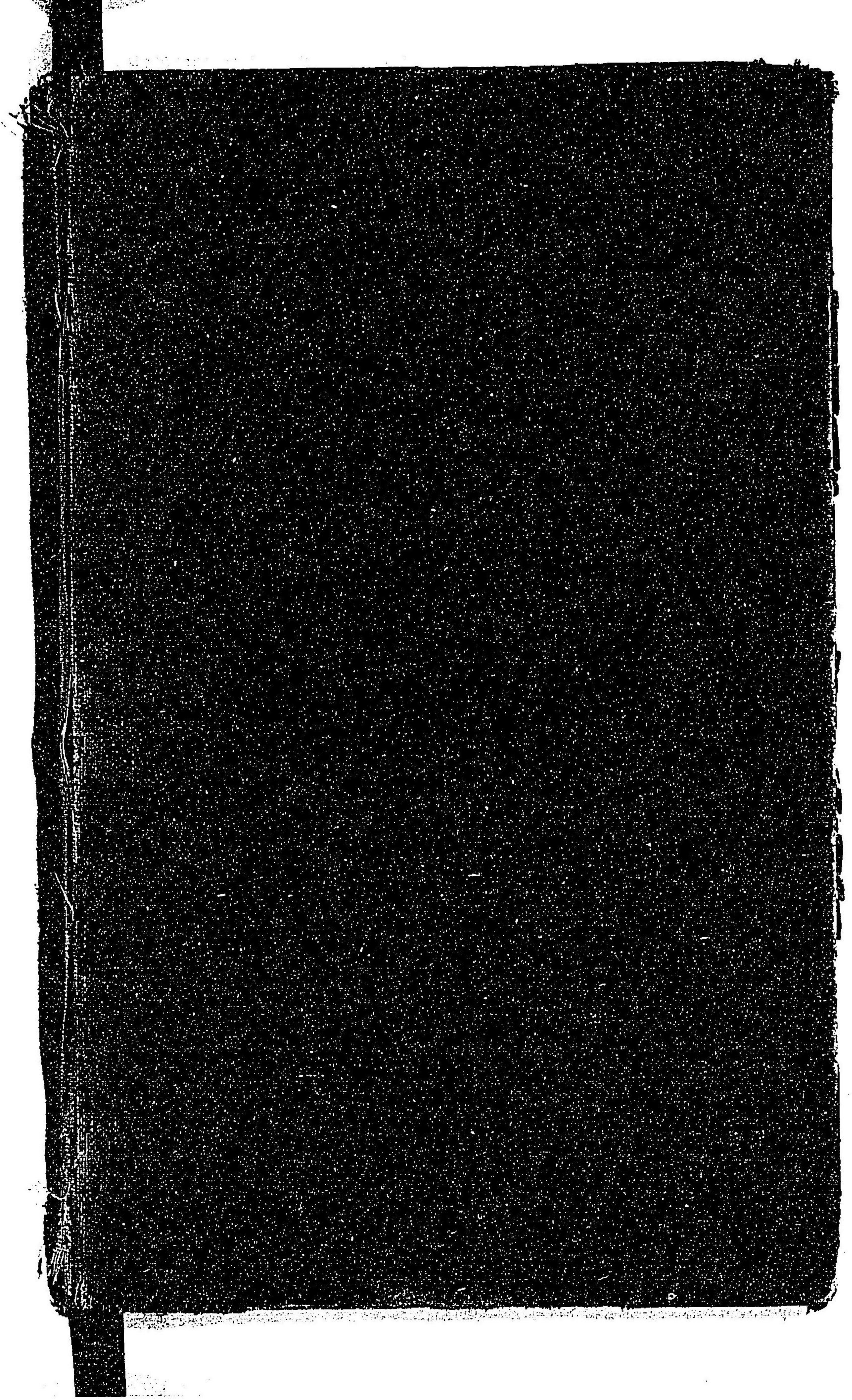
23



Faint handwritten text, possibly a signature or name, located in the upper right quadrant of the page.

Faint handwritten text, possibly a signature or name, located in the lower right quadrant of the page.

338
23



101281-000-6

338-23

のらくら三人男

ジローム/著

M44

DBY-0611

